

コリアの近代化と音楽——その2

小林 孝行*

1. コリアにおける唱歌の誕生

近代における唱歌は、そもそも日本の近代学校教育における音楽教科の名称として用いられたものであるが、また歌曲および歌唱をも意味していた。『新訂標準音楽辞典』、1966、883) コリアにおいても唱歌という用語は、日本からもたらされたもので、近代の西洋音楽導入において大きな意味をもって用いられている。コリアにおける唱歌とは、「1945年以前わが国に輸入された全ての西洋の歌と、童謡、大衆歌謡、歌曲などに分化される以前に、わが国の人々によって作られた西洋式歌の総称」(ミン、1997、i)であり、「西洋の歌、または西洋式の楽曲に啓蒙思想、反日感情、愛国思想など当時の時代像を反映した歌詞をつけた歌」であって、「20世紀始めの韓国西洋音楽の主流を形成」(イ、キム、ミン、2001、35)していたと考えられる。

コリアの唱歌には、二つの特徴がある。その一つは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、いわゆるコリアの開化期に、主としてコリア人の手によって啓蒙的な歌詞が作られ歌われたもの、そして日本の植民地支配のもとで朝鮮総督府によって不良唱歌として規制されながらも、コリア各地あるいは中国等で民族主義運動と結びついて様々な抗日、反日的な意味をもって歌われたものであり、もう一つは日本の植民地支配のもとで、学校教育で唱歌教科の中で歌われた、いわば日本的な意味での唱歌である。

ところで、上に述べた二つの特徴は、唱歌をあくまで歌詞の分析を中心にしたもので、曲については、必ずしもそのようにはいえない。

コリアの啓蒙的唱歌の原曲についていえば、最初は讃美歌やヨーロッパ民謡など欧米人によって作曲されたものがほとんどで、後には日本人によって作曲されたものが加えられたが、コリア人自身によって作曲されたオリジナル曲は極めて少ない。唱歌の原曲である讃美歌やヨーロッパ民謡については、コリアと日本では、同じように唱歌の原曲として用いられている曲が多いのである。讃美歌やヨーロッパ民謡などの原曲のコリアへの移入経路は、アメリカ人宣教師の手によるものと、日本を経由したものの二つが考えられる。そのなかで、アメリカの宣教師の手によるものも、日本と共通点が多い。それは宣教師派遣の母体が、日本と同じアメリカプロテスタント教会の長老派、会衆派などであり、コリアへ派遣された宣教師も日本を経由してコリアに渡って

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

いるからである。

コリアにおける初期の啓蒙的唱歌はキリスト教の影響が大きい。コリアに移入された讃美歌に、歌詞はコリア人キリスト教徒ないしはキリスト教に共感したコリア人啓蒙思想家によって作詞されたものが多い。最初の唱歌、愛国歌といわれるものは、1896年9月9日にソウルのセムンアン教会で歌われた「皇帝誕辰慶祝歌」である。この曲は讃美歌であり、イギリスの国歌で、アメリカでは「アメリカ」として歌われた曲の旋律に

「我が皇上陛下 天地日月のように 萬寿無疆 山高く 水清い 我が大韓帝国 神様がお助けになり 独立富強」という歌詞をつけて歌われた。

もう一つの代表的な愛国歌としては、1896年11月21日独立門定礎式で歌われた「愛国歌」である。この曲は、培材学堂のバンカー宣教師の指導で「Auld Lang Syne」(スコットランド民謡、日本では「螢の光」として知られる)の旋律に、

「東海の水と白頭山が乾き尽くすまで 神様が助けて下さり わが国万歳 むくげ 三千里 華麗江川 大韓人の大韓として 永く守ろう」という歌詞をつけて歌われたものである。この歌詞は当時の開化派政治家で、紳士遊覧団の一員として日本を訪問し、1898年独立協会の会長となり、また後にキリスト教指導者となった尹チホの作詞といわれている。

これらの歌の歌詞には、両方に「神様」が書かれており、キリスト教の影響が大きいものであったといえるが、最初の愛国歌は皇帝を称える内容であり、もう一つの愛国歌はコリアの自然を称える内容である。後者の愛国歌は、日本の植民地時代に設立された臨時政府でも、国歌とされ、また解放直後のコリアでも愛国歌として、歌われていた。現代の大韓民国の国歌（愛国歌）は、曲は安益泰によって作曲されたものに変えられているが、その歌詞はほとんどそのままである。ただし、神様（하나님）は天（하느님）に置き換えられている。

以上二つの曲は、いずれも尹チホが1905年に編纂した「讃美歌」集に掲載されている。この「讃美歌」集には、15曲が掲載され、そのうち、前者は第1章「コリア」として、後者は第14章「愛国讃聖歌」「Patriotic Hymn」として収録されている。なお、第10章も第14章と同じ「Auld Lang Syne」の曲に、「スンジャシンソン（聖子神孫）」という歌詞の「愛国讃聖歌III」「Patriotic Hymn No.III」と表記された歌となっている。しかしながら、この讃美歌はキリスト教各教派の公認はされることはなかった。

2. 官製唱歌集の出版

コリアにおいて出版された唱歌集の調査を行ったミン・ギョンチャンによると（ミン「韓国唱歌の索引と解題」、1997）、韓国唱歌集の出版年度は1896年から1946年まで118冊刊行されている。そのなかで、朝鮮総督府編纂などの官製唱歌集とみなされるものは66冊、私製唱歌集は53冊刊行されている。

官製唱歌集は基本的にはコリアで成立した学校において使用するために、音楽教科書として作成されたものである。朝鮮教育令の改正によってそのつど改定されて出版されている。その編集方針としては、基本的に日本の学校で歌われた唱歌を中心として編集されているが、時としてコリア人の作詞作曲のものも載せられている。

1896年から1910年まで、「新編教育唱歌集」(第1集から第8集)教育音楽講習会(編)、および「尋常小学唱歌」(第一学年上中下から第四学年上中下)佐々木吉三郎、納所弁次郎、田村虎蔵(共編)で、日本人によって編集され、日本の学校で使用されたものである。

「『新編教育唱歌集』は『尋常小学唱歌』とともにわが国で使用された最初の音楽教科書である。わが国の音楽教育は1906年ごろから始められたが、当時は音楽教科書がなかったために、日本で使用されていたものをそのまま使用した。したがって歌詞は全部日本語となっており、曲は以前に出た日本の唱歌集に収録された曲と日本人が作曲した新曲そして日本人が輸入した西洋の曲で構成されている。」(ミン、1997、31)

当時の韓国(大韓帝国)政府の学部が編纂した唱歌集で現存するもっとも古いものは「普通教育唱歌集」韓国政府印刷局(1910年)である。この本は、「韓国で作られた最初の音楽教科書である。植民地となる直前の1910年5月22日に発行されたが、実際に使用された時は統監府時代ではなく、植民地時代であった」(ミン、1997、39)というもので、27曲が掲載され、日本の唱歌が多いが、歌詞はコリア語に翻訳されている。また、1曲だけコリア人金仁湜の作曲による「漂衣」も載せられている。

公立学校では、その後も日本の唱歌教科書を基にして、朝鮮総督府によって朝鮮教育令の改定に合わせて、『新編唱歌集』(1914年)、『普通学校唱歌書』(1920年)、『初等唱歌』(1939年)などが編纂され使用されたが、『普通学校補充唱歌集』(1926年)は、それまでのものとは異なった曲が載せられている。

「普通学校の補充教科書として作られたこの本は、文化政策の一環として作られたものと考えられ、朝鮮総督府で発行された他の唱歌教科書とは少しその様相が異なっている。すなわち、既存の教科書と以後の教科書は全部日本の教科書を土台としているのに比べ、『普通学校補充唱歌集』は懸賞募集を通して集めた歌詞と朝鮮語読本に収録されたオンモン教材を歌詞として作曲した曲が多い。」(ミン、1997、45)曲目としては「昔脱解」「成三問」「金剛山」「高麗」「百済」「京城」「釜山港」など朝鮮の歴史や地理を題材としたものが載せられている。

「総147ページで、緒言、第1学年用10曲(日本語4曲、韓国語6曲)、第2学年用10曲(日本語4曲、韓国語6曲)、第3学年用10曲(日本語7曲、韓国語3曲)、第4学年用10曲(日本語8曲、韓国語2曲)、第5学年用10曲(日本語7曲、韓国語3曲)、第6学年用10曲(日本語9曲、韓国語1曲)など総60曲が収録されている。この中で17曲が再収録曲で、43曲が新しく収録された曲である。そして日本語歌詞となった曲が39曲(65%)、韓国語歌詞となった曲が21曲(35%)

で、韓国語歌詞となったといっても、大部分日本人が作曲した。」(ミン、1997、45)

1939年には第3次朝鮮教育令に伴って、コリア人の皇国臣民化を推し進めるために、「君が代」儀式唱歌や中国大陸への進出を歌った軍歌風の唱歌が載せられた「みくにのうた」が発行されている。

3. 私製唱歌集の出版

刊行された53冊の私製唱歌集は、個人ないしは私立学校で編纂されたもので、内容は官製唱歌集に載せられたものも含まれるが、コリア独自の唱歌、啓蒙的、抗日的内容の唱歌も含まれる。私製唱歌集は、個人、学校、基督教会などによって出版されている。個人としては、鄭敬揮によって編集されたものが12冊、李尚俊によって編集されたものが5冊、金在憲によって編集されたものが3冊、車士百によって編集されたものが3冊、その他、洪蘭坡(永厚)『通俗唱歌集』、盧永稿『槿花唱歌集』、白禹鏞『20世紀青年女子唱歌』などが編集発行されている。私製唱歌集のなかでは11冊が朝鮮総督府によって禁止処分が出されている。

3-1. 崔南善と京釜鉄道歌

1908年には、「京釜鉄道歌」が出版されている。この曲は日本に留学した六堂(公六)崔南善によって書かれたものである。前述したキリスト教の影響を受け、コリアで作られた愛国歌とは違って、日本の近代化との関係があり、日本を経由して作られたといえる。

崔南善は、1890年に生まれ、後に啓蒙思想家、歴史学者、地理学者、ジャーナリスト、雑誌編集者、教育者などとして多方面に優れた才能を発揮して活躍した知識人であるが、1904年に皇室留学生として、1906年には早稲田大学高師部地理歴史科に入学するため、若い時期に日本に留学している。そこで、日本の鉄道唱歌を参考にして、ソウルから釜山まで開通した鉄道を記念して、スコットランド民謡 Coming through the rye (日本では、大和田建樹によって「故郷の空」として知られ、「明治唱歌(第一集)」に発表された)の曲に、ソウルから釜山までの地理と歴史を踏まえて、67余節ある「京釜鉄道歌」を作っている。その第一節は

「우렁차게 토하난 기적 소리에 / 남대문을 등지고 떠나 나가서 / 빨리부난 바람의 형세같으니 / 날개가진 새라도 못따르겠네 (力強く吐き出す汽笛の音で／南大門を後に出発すると／風のように早いので／翼を持つ鳥でもついていけないなあ)」である。

このコリア語の歌詞は七五調でできている。この七五調はもともとコリア語にはないもので、日本語から取り入れられたものであり、最初に崔南善によって導入されたものであったといわれている。この七五調の歌詞はその後の方定煥、李元寿などの歌においても用いられている。

崔南善はその後、「世界一週歌」(1914)を雑誌「青春」に発表している。その趣旨として、「世界地理歴史上、緊要な知識を得るとともに、朝鮮が世界交通上重要な部分であることを認識することを趣旨として編集した。この編は今日世界の大勢に切迫した関係にあるわが国を世界の

大交通路により順版に遊歴することにしたので、経過線が北半球の中間部に限られている。この編にもれている部分は、他日題を改めて別編を作ろうと思う。」(『六堂崔南善全集』第5巻、353)として、朝鮮、中国、モンゴル、ロシア、ドイツ、ギリシャ、イタリア、フランス、イギリス、アメリカそして日本などの地理歴史が描かれている。

ついで、1928年には朝鮮各地の地理と歴史を描いた「朝鮮遊覧歌」(80節)、「朝鮮遊覧別曲」(20節)を刊行している。なお、「朝鮮遊覧歌」は金永煥によって作曲され、「朝鮮遊覧別曲」は白禹鏞によって作曲されている。

3-2. 金仁湜と「普通唱歌集」

金仁湜はコリアで最も早く音楽家として活躍した人で、コリアの近代音楽の先駆者といわれている。金仁湜は1885年平安北道で生まれ、ピョンヤンにあったミッションスクール崇徳学校、崇実専門学校を卒業した。その学校で、宣教師夫人ハントなどから音楽を学んだ。その後、ソウルに移ってサンドン青年学院中学部の音楽教師、コリアで最初に専門の音楽教育機関として作られた朝陽倶楽部とその後身である朝鮮正楽伝習所の教師として、音楽教育に当たった。音楽教育の他に「ヘンデルの＜メサイア＞」の翻訳を始めとして、多くの讃美歌の歌詞を翻訳し、1913年＜霊山会像＞、＜与民楽＞など伝統音楽を五線譜に採譜して、＜愛国歌＞、＜前進歌＞、＜国旗歌＞などを作曲した。」(韓国作曲家辞典、146)

コリア人によって、作曲された最初の唱歌(創作唱歌)としては、1905年に、当時崇実専門学校在学中であった金仁湜によって作詞作曲された「学徒(歌)」という歌であった。

その歌詞は「学徒よ 学徒よ あの青山をあおぎ見よ 古い木は腐ってしまうが 霊木は蘇生する」

この曲について、関は「金仁湜は1905年、小学校の運動会のために＜学徒＞という唱歌を作ったが、この歌が韓国最初の創作唱歌である。だから韓国の創作音楽史は1905年から始まったといえる。＜学徒＞は4分の3拍子となっており、日本の唱歌とはまったく異なる雰囲気曲である。韓国の唱歌が日本唱歌の影響を受けなかったならば、独自の道を歩むことができたであろうことを示唆する曲でもある。」と解説している。(関、2000、138)

金仁湜は、「学徒歌」の他に、「ピョモガ」、「壮年男子歌」、「愛国歌」、「前進歌」、「国旗歌」という唱歌を作曲する他、現存するコリア人による最初の唱歌集である『(教科適用)普通唱歌集』(1912年)や、『朝鮮旧楽霊山会像』(1914年)などを編集出版している。(韓国作曲家辞典、146)。

金仁湜編集の『普通唱歌集』には、「小川」(作曲者未確認)、「からす」(作曲者未確認)、「名月」(作曲者未確認)、「蝶」(作曲者未確認)、「口は一つ」(作曲者未確認)、「父母の恩(1)」(作曲者未確認)、「父母の恩(2)」(M. モリス ウェルズ作曲)、「師の恩」(作曲者未詳)、「掃除」(作曲者確認)、「星」(作曲者未確認)、「帰雁」(作曲者未確認)、「時計」(作曲者未確認)、「太平洋行」(作曲者未確認)、「日曜日」(作曲者未確認)、「登山」(作曲者未確認)、「望郷」(作

曲者未詳)、「惜別」(作曲者未確認)、「告別」(W. グールド作曲)、「惜陰」(作曲者未確認)、「勸学(1)」(L. メーソン作曲)、「勸学(2)」(A. ミラー作曲)、「秋菊」(作曲者未確認)、「コロンブス」(作曲者未確認)、「苦学」(作曲者未確認)、「学友」(作曲者未確認)、「アプロ」(H. C. ワーク作曲)、「春」(作曲者未確認)、「修学旅行」(作曲者未確認)、「優勝旗」(作曲者未確認)、「世界地理歌」(作曲者未確認)、「卒業式」(作曲者未確認)、などの曲が収録されている。

3-3. 光成中学校「最新唱歌集」

私製唱歌集の代表的なものとしては、旧満州に設立された光成中学校「最新唱歌集」(1914年)である。この唱歌集には、戦後になって発見されたもので、これまでの愛国的、啓蒙的、民族的あるいは反日、抗日的唱歌として、朝鮮総督府によって不良唱歌として規制されながら、ひそかに歌い継がれていた唱歌が載せられている。これは1996年に韓国国家報勳処で復刻されている。「この本は1914年以前に歌われた唱歌を集大成したという意味をもっており、現在まで1914年以前に民間人が作った楽譜がある唱歌集は金仁湜が1912年に編纂した『(教科適用)普通唱歌集』以外に発掘が出来ず、相当重要な資料集的な性格をもっている。」(ミン、1997、68)この本には152曲が収録されている。またこの本は「愛国、愛族と民族精神の涵養のため作られて歌われた民族の歌が152編と、楽譜と一緒に収録されている」とも評価されている。(イ、キム、ミン、2001、96)

この唱歌集の曲名では、「運動」8曲、「愛国」7曲、「勸学」4曲、「学徒」3曲、「卒業」3曲、「国歌」2曲、「自由」2曲、「前進」2曲、「前進」2曲、「警醒」2曲、「国民」2曲、「血誠隊」2曲、「登山」2曲、「カマギィ」2曲、「歓迎」2曲、「自由」2曲、「師の恩」2曲と同じ曲名のものも含まれている。そのなかで、「国歌」としては、前述した最初に作られた愛国歌と、エッケルトが作曲したものが載せられており、前述した二番目の愛国歌は「愛国」となっている。

原曲は作曲者未確認となっているものが多いが、西欧の民謡、讃美歌などに、新たな歌詞をつけて歌われたものもある。また同一の原曲に異なった歌詞をつけ、別の歌としても歌われた場合もある。

その中でもっとも多いものは、1830年メーソン編曲のアメリカ讃美歌を原曲としたもので、「愛国」、「勸学」、「卒業」、「同志」、「カルチラド(いけども)」など5曲が載せられている。次いで、ワーク作曲讃美歌を原曲としたものは、「警醒」、「作隊」、「保国」、「国文創立記念」の4曲、スコット作曲スコットランド民謡「アニーローリー」を原曲としたものが「愛国」と「朝鮮魂」の2曲、1867年ウェブスター作曲の讃美歌を原曲としたものは、「マンナセンガク」と「朝春(春朝)」の2曲、1852年ステッフ作曲讃美歌を原曲としたものは、「大韓少年気概」と「猛進」の2曲、1879年マイナー作曲、アメリカ讃美歌を原曲としたものは、「勸学」と「学生前進」の

2曲がある。その他、「愛国歌」(原曲:1856年メーソン作曲讃美歌)、「守節」(原曲:1851年フォスター作曲)、「愛国」(原曲:ホラティウス作曲ドイツ民謡「もみの木」)、「警醒」(原曲:フィッシャー作曲、アメリカ讃美歌)、「希望」(原曲:1940年、メーソン作曲讃美歌)、「感恩」(原曲:1858年ウェルズ作曲讃美歌)、「告別歌」(原曲:1883年トモー作曲讃美歌)、「英雄追悼」(原曲:F. J. ハイドン作曲)などが載せられている。いずれも讃美歌を原曲とするものが多い。

また、日本の曲としては「鉄道唱歌」が原曲となっているものが、「運動」、「学徒」、「カマガイ」、「祖先のため」、「農夫」の5曲と、「鉄道唱歌」の類似曲が数曲載せられている。その他、「勸学」(原曲:奥好義作曲「勇敢なる水兵」)、「檀君紀念」(原曲:「紀元節」)、「四節」(原曲:日本唱歌「春のやよい」)などがある。

3-4. 李尚俊と唱歌集

李尚俊は1884年黄海道で生まれて、12歳の時ソウルにあるミッションスクールピアソン聖学校に入学し、そこで新しい教育を受けるとともに、音楽も学んだ。15歳の時に音楽教師となったが、朝陽倶楽部、朝鮮正楽伝習所に入学し、金仁湜から西洋音楽を学んだ。李尚俊は「一生を音楽教師として送りながら、西洋音楽の普及に尽くし、多くの伝統音楽を西洋式楽譜として採譜と補填を行い、唱歌の作曲を始め唱歌集および教材を発行した。」(韓国作曲家辞典、1999、347)

李尚俊の作曲した唱歌としては、「蝶」、「蟻」、「時計」、「雨」、「孝順」、「師の恩」、「春来」、「夏」、「夏期休業」、「海」、「修学旅行」、「雁」、「新年」、「冬」、「秋」、「隠士」、「運動歌」、「惜別」、「青山」、「星」、「学習」、「山水」、「日曜日歌」、「わが学校」、「灯火」、「春風」、「勸学歌」、「農夫歌」、「汽車歌」、「登山」、「アプロ」、「父母の考え」、「雲」、「微文野球応援歌」、「微文校歌」、「歳暮」、「松栢」、「普成野球応援歌」、「漁夫」、「わが家庭」、「月」、「蓮花」、「朝起」、「蒙恩歌」、「卒業式歌」、「植樹」、「牡丹峰歌」、「サクラ」、「大洋」、「思母曲」、「月下行船」、「徳盛普校校歌」、「飛行機」、「勸学歌」、「学校記念歌」、「学生追悼歌」、「仁宅」、「庭球歌」、「普成高普校応援歌」、「望郷歌」、「普成高普校校歌」などがあり(イ、キム、ミン、2001、107-109)、編集した音楽書としては『喇叭曲集』、『ポジン朝鮮雑歌集』(1916年)、『最新唱歌集』(1918年)、『新選俗曲集』(1921年)、『風琴独習 中等唱歌集』(1921年)、『新流行唱歌集』(1922年)、『楽理附中学唱歌集』(1922年)、『普通楽典大要』(1926年)、『朝鮮俗曲集』(1929年)、『笑哀唱歌集』(1930年)などがあり(韓国作曲家辞典、1999、347)、活発な音楽活動を行っている。

李尚俊編集の『新流行唱歌集』では23編が掲載されている。そのなかには、「青年警戒歌」、「喇叭節」、「思故国歌」、「カチューシャ」、「離別歌」、「沈清歌」、「長恨夢歌」、「散歩歌」、「落花流水」、「枯れた芳草」、「愛の歌」、「落花岩」、「死の讃美」、「ダニュープ河」、「漂泊歌」などがある。この「流行唱歌」には、これまでの啓蒙的な唱歌以外のさまざまな歌が載せられている。

3-5. 安愛理と唱歌集

安愛理編集による「唱歌集」は、1915年に第1版、1920年に第2版がソウル耶穌教書会と平城耶穌教書院から出版されている。この編集者安愛理はコリアの讃美歌の編集に当たったベアード夫人のコリア名である。この唱歌集は第1部と第2部からなり、第1部では一般唱歌46曲、第2部では讃美歌19曲が収録されている。唱歌のなかにも、讃美歌の曲に歌詞を付けたものも見られる。

「この唱歌集は書名のために讃美歌集ではなく、一般唱歌集と誤解されもするが、二つの部分に分かれて構成され、第1部は一般唱歌を、第2部は讃美歌を収録している。総65曲中、第1部に46曲、第2部に19曲を収録した。第1部にも、讃美歌を部分的に収録している。歌の題目で讃美歌という印象を感じることはできないが、歌詞に讃聖、主に、十字架、イエス、天国、旧約聖書目録などの用語とともに、キリスト教に関連した内容を収録している。」（ムン、2002、535）したがって、この本は唱歌集といいながら、その編集者、出版社、収録曲から讃美歌集に近いものといえる。

3-6. 鄭敬揮と唱歌集

もっとも多くの唱歌集を編集出版したのは、鄭敬揮である。それを列挙すれば、『樂園唱歌』（1920年）、『（現行）樂園唱歌集』（1921年）、『（四詩長春）樂園唱歌』（1921年）、『（朝鮮）名勝地理唱歌』（1921年）、『（東西）偉人唱歌』（1921年）、『（緑陰芳草）鄭友鶯』（1921年）、『二十世紀新女子唱歌』（1922年）、『二十世紀新青年唱歌』（1922年）、『（朝鮮地理）景概唱歌』（1922年）、『（随時）叙情唱歌』（1922年）、『（花山月臺）弄琴唱歌』（1922年）、『青年ノレカラク唱歌』（1937年）である。そのなかで、『（朝鮮）名勝地理唱歌』は李尚俊が編曲者となっている。「朝鮮の風物を納めた写真と緒言、そして48編の唱歌で構成されている。すべて鄭敬揮が作詞をし、李尚俊が編曲をした。」（ミン、1997、73）。『（東西）偉人唱歌』では、「音楽は鄭聖采と盧永稿が共同で編曲をした。」（ミン、1997、75）。この中には23篇が載せられているが、人物では「成吉思汗」「乙支文徳」「李舜臣」と並んで「西郷隆盛」がはいっている。『（緑陰芳草）鄭友鶯』では、「長恨夢歌」など33編の歌詞が収録されている。この「長恨夢歌」は、日本の「金色夜叉」の翻案曲で、日本では必ずしも唱歌とみなされてはいない。『二十世紀新女子唱歌』では、鄭敬揮作詞、白禹鏞作曲となっており、『二十世紀新青年唱歌』では鄭敬揮作詞、盧永稿作曲となっている。

『（朝鮮地理）景概唱歌』では白禹鏞が作曲者となって、38編の唱歌が載せられている。その中には「京城景概歌」「仁川景概歌」「大邱景概歌」「釜山景概歌」「開城景概歌」など題名がある。

白禹鏞は1883年ソウル出身で、1902年に軍楽隊の指導者としてコリアに招聘されたエッケルトのもとで、音楽の指導を受け、1904年軍楽中隊軍楽長、1907年に軍楽中隊の一等軍楽長に昇任し、「軍楽隊とその後身である李王職洋楽隊で活動したが、1915年にこの団体が解散されると、エッケルトとともに民間団体である京城洋楽隊を組織して、1916年エッケルトが死亡すると、その後をついで楽隊を指導してきた。」（韓国作曲家辞典、1999、244-245）また、白禹鏞は「わが国の

人間として最初に軍楽隊長を努め、軍楽隊長の時代に相当数の作品を作曲したが、作曲をしたという記録だけは伝えられているだけで、どのような曲を書いたかは知られていない。」(韓国作曲家辞典、1999、245)となっているので、上に述べた『(朝鮮地理)景概唱歌』の曲が白禹鏞であるかどうかの確認は難しい。

『(随時)叙情唱歌』では、「35編の唱歌で構成されている。すべて鄭敬揮が作詞をして、盧永稿が作曲をした。」(ミン、1997、77)その題名は「春蝶歌」、「春蝶の和答歌」、「喚友声」、「喚友の和答歌」、「秋夜月船遊歌」、「船遊和答歌」、「冬節景」、「冬節和答歌」、「春景」、「夏景」、「秋景」、「冬景」、「杜鵑声」、「ツバメ歌」、「鸚鵡鳥」、「鶯」、「雁の声」、「鸚鵡の節」、「白鷗歌」、「桃花」、「牡丹花」、「無窮花」、「蓮花歌」、「菊花」、「梅花」、「不遇歌」、「雨中愁」、「秋の気がかり」、「冬の愁」、「除夜の游子」、「楽情」、「ニムクリョ時調」、「他郷の涙」、「新春香歌」、「愛の別」などである。『(花山月臺)弄琴唱歌』では、17編が載せられている。題名は「春憂」、「惜春」、「愛歌」、「長恨夢歌」、「愛の死」、「車別」、「長恨歌」、「情懷」、「情回答歌」、「思慕歌」、「別涙」、「相思歌」、「美人」、「春の恨」、「三春有情歌」、「故郷の愁」、「警戒」などである。

3-7. 洪永厚と唱歌集

洪永厚(蘭坡)は、童謡、歌曲などの作曲、演奏、指導、評論活動が有名であるが、唱歌も作曲し、「唱歌集」も編集している。洪永厚が編集した『通俗唱歌集』(1916、1917再版)では、「君が代」、「鶯」(F. ハラー作曲)、「初霖」(フォスター作曲)、「今日は日曜」、「富士山」、「恩故友」(アイルランド民謡)、「売花女」(作曲者未確認)、「天然の美」(田中穂積作曲)、「怒りの波濤」(作曲者未確認)、「月夜」(スコットランド民謡)、「秋色」、「行船」(作曲者未確認)、「ナワハムケカジ」、「オモニムペプケネ」などが収録されている。この唱歌集の中には自身が作曲した「野球戦」も載せられている(ミン、1997、400-404)。これは日本へ留学する前に作曲したものであるが、当時の行進曲風、軍歌風唱歌という日本の唱歌の影響を受けている。また、楽友会編の『世界名曲通俗唱歌集』(出版年度不明)も、洪永厚によるものとされている。この唱歌集には、「バラのとげ」、「カルメン」、「リゴレット」、「ゴンドラ」、「西洋舞曲」など西洋の曲、「枯れた芳草」などの日本の曲、そして「アリラン打鈴」、「トラジ打鈴」などコリアの曲、全部で46曲が収録されている。「大衆歌謡、唱歌、雑歌などが総網羅され、通俗唱歌と称するのが特徴である。」(ミン、1997、95)

3-8. 児童のための唱歌集

富來雲編集の『(遊戯)唱歌集』は梨花幼稚園が発行している。その序言には、

「この本は小学生と幼稚園児童と家庭にいる子どもたちに喜びと楽しみを与えるために作られたもので、ここに集められた遊戯は梨花幼稚園で最初に教えられた新しいものである。」(ミン、1997、86)と述べられている。

この唱歌集には63編が掲載されているが、その題名の主なものは「挨拶の歌」、「朝の歌」、「子

犬」、「黒い羊」、「みんな、踊ろう」、「おまえと僕」、「私たちが踊ろう」、「行進歌」、「時計」、「小さな松」、「一週間、私の勉強」などである（ミン、1997、87）。

朴奉愛の編集した『遊戯唱歌集』も梨花保育学校で発行されている。その中には31編が掲載されているが、その題名は「雲にかすむお月様」（中山晋平作曲）、「踊る落ち葉」、「郵便配達夫」（杉江季作曲）、「ウンパヨンヨル」、「キューピーや」、「汽車旅行」、「チューリップの兵隊」（中山晋平作曲）、「おもちゃの行進曲」、「ひばり」、「雨よ、ふれ」（中山晋平作曲）、「子ども行進曲」（鄭淳哲作曲）、「竹の船」、「鶯の夢」（中山晋平作曲）、「わが娘の踊り」、「角の家」、「ヨハン」、「正月の歌」、「夕焼け」、「秋の夜」、「すずめ」、「あられ」、「お月様」（室崎琴月作曲）、「春よ、こい」、「幼稚園の門」、「縄跳び」（岡野貞一作曲）、「ゴム風船」、「蓮池に鯉」、「兵隊人形」などである（ミン、1997、89）。

また、車士百・李栄甫共編の『表情遊戯唱歌集 第1輯』はソウル、中央保育学校で発行されている。その唱歌集には34編が掲載されている。その題名は、「ボールと凧」、「水遊び」、「カッコウ」、「月と遊戯」、「雪」、「太」、「金の鮎」、「楓の葉」、「海」、「春の日」、「正月」、「雪だるま」、「蛍の光」、「シルム」、「かえる」、「花」、「ひよこ」、「朝鮮の子ども」、「動物園」、「さようなら」、「遠足」、「ピョンデ」などが掲載されている（ミン、1997、91-92）。

車士百・李栄甫共編の『表情遊戯唱歌集 第2輯』では、66編が掲載されている。その題名は、「すずめの幼稚園」、「水遊び」、「猫」、「ひよこ」、「雪花鳥」（鄭泰浩作曲）、「はと」、「春のお出かけ」（権泰浩作曲）、「花畑」（朴泰俊作曲）、「飛行機」、「人形」、「木の葉」、「幼友達」、「自然の讚美」、「すずめの踊り」、「電車」、「クリスマスの鐘」（室崎琴月作曲）、「月のウサギ」、「明るい月」、「蓮池に鯉」、「からす」、「ミツバチ」、「シンソレ」、「農村の子ども」（権泰浩作曲）、「風車と水車」、「雉取り」（小松耕補作曲）、「兄弟星」、「誰ですか」、「メンコンイ」、「挨拶の歌」、「幼稚園の門」、「お月様」、「さらさら雪」、「すずめ」、「鯉のぼり」（草川作曲）、「魚釣り」（尹克栄作曲）、「朝鮮の子どもの歌」（権泰浩作曲）、「慶州」（萩原英一作曲）、「一、二、三」、「鳥の群れ」（尹克栄作曲）、「小さな手」、「兵隊ごっこ」、「ハツカネズミ」、「クリスマス」、「クリスマスツリー」、「菊の花」、「月夜にウサギ」、「ポンポン」、「兵隊喇叭」、「西山に太陽」、「正月の歌」、「秋の葉」（梁田貞作曲）、「シャボン玉」、「かえる」、「おきな草」などである（ミン、1997、92）。

そして車士百・李栄甫共編の『表情遊戯唱歌集 第3輯』でも、33編が掲載されている。「トカクトタク時計」、「飛行機」、「汽車」、「はと」、「幼稚園」、「金の鮎」、「ひまわり」、「拍手ダンス」、「春の歌」、「シーソー」、「チューリップ」、「海辺の貝」、「私の手、私の足」、「兵隊」、「蝶」、「楽隊」、「帰ろう」、「チェンアチェンア」、「私の影」、「子どもたちの巡邏兵」、「かっこう」、「かくれんぼ」、「丸いお日さま」などである（ミン、1997、93）。

3-9. 1920年代後半以降の唱歌集

これまで紹介しなかった私製唱歌集のなかで、1920年代後半以降に出版されたものを書名だけをあげると、『(少年少女)教育流行唱歌集』(1927)、『普通学生唱歌集』(1928)、『サンスル唱歌』(1929)、『(最新日鮮)唱歌全集』(1929以前)、『(新式流行)二八青春唱歌集』(1929)、『選抜唱歌集』(1930)、『パンアタリョン唱歌』(1932)、『五大レコード会社大流行新唱歌』(1933)、『青年男女三千里新唱歌集』(1934)、『現代流行八道唱歌詩集』(1934)、『新編国音唱歌中集』(1935以前)、『特別無窮花唱歌集』(1935)、『江南打鈴チェビ唱歌集』(1935)、『ソウル打鈴唱歌集』(1935)、『朝鮮行進曲唱歌集』(1935)、『モダンソウル唱歌集』(1937)、『農村振興唱歌集』(1938)、『女性唱歌集』(1946)などである(ミン、1997、26-27)。

以上の書名だけ見ても、これまでの学校唱歌、啓蒙唱歌とは異なる多様な唱歌であることがわかる。そのなかで、代表的なものをあげてみる。

姜範声編集の『(新式流行)二八青春唱歌集』には、「111編の唱歌が数字譜で収録されていて、30編の新式雑歌の歌詞が収録がされている。」(ミン、1997、83)その題名は「鐘路行進曲」、「君恋し」、「東京行進曲」、「砂漠のメロディ」、「昏街」、「恋の歌」、「暗夜」、「国境の歌」、「ノンキな父さん」、「椿姫の唄」、「男の恨み」、「関の五本松」、「ベニスの唄」、「金小舟」、「別れの唄」、「夫婦船頭」、「船頭唄」、「江南の月夜」、「セトンム」、「吹けよ、春風」、「死の讃美」、「失恋歌」、「枯れた芳草」、「故国を思う」、「沈清歌」、「恋愛歌」、「涙」、「康明花絶命曲」、「悲哀の曲」、「虚栄の笑い」、「思友」、「妓生警戒歌」、「サランの歌」、「李花蓮失恋悲嘆曲」、「追憶」、「巫女の歌の調子」、「流浪の旅」、「花園の恋愛」、「物産奨励歌」、「望郷歌」、「有情歌」、「アニーロリー」、「情人思慕歌」、「新調春香離別歌」、「汽車行進曲」、「籠の鳥」、「関東八景」、「野球歌」、「妓生の歌の調子」、「朝鮮国境歌」、「活動写真俳優歌」、「新鴨緑江節」、「エスペラント唱歌」、「アリラン」、「落花岩」、「大学生の歌」、「東京町」、「酒台の歌」、「コンドラ」、「リゴレット」などが掲載されている。

金明喆編集の『選抜唱歌集』では、「1930年ピョンヤンで出版された。唱歌集は大部分ソウルで出版されていて、ピョンヤンで出版されたものは何編かにもならない。そしてソウルで出版されたものは大部分、日本の唱歌集に依存しているのに比べ、ピョンヤンで出版された唱歌集は、唱歌集と西洋の歌が多いのが特徴である。」(ミン、1997、85)

この唱歌集の中には、30編が掲載されている。その題名は、「春の蝶(ドイツ民謡)」、「行進歌」、「きれいな蝶」(G. ヴェルディ作曲)、「向こう側で会おうか」(R. ライス作曲)、「本分をつくせ」(R. バージョン作曲)、「主にたよる」(W. ブラッドベリ作曲)、「日の光」、「春が来る」(A. ルビンシュタイン作曲)、「よく寝よ、わが子よ」(J. ブラムス作曲)、「ケンタッキーの我が家」(S. フォスター作曲)、「離別」、「メギの追憶」(J. バターフィールド作曲)、「静かな夜」(F. グルーバー作曲)、「優勝旗」(R. ワグナー作曲)、「クレメンタイン」(P. モントローズ作曲)、「わが児」、「幸福を下さい」、「朝の市内」、「世の終りの日」(L. メーソン作曲)、

「小さなこと」、「昔を想う」(T. モア作曲)、「主イエスの復活」(ウォーガム作曲)、「船漕ぎ」(D. オーバー作曲)、「サンタルチア」(イタリア民謡)、「いつも喜べ」、「踊ろう」、「輝く夜」(R. ウィリス作曲)、「牡丹峰歌」(D. エメット作曲)、「小さな星」(W. モーツァルト作曲)、「ホトトギスの鳴き声」(ノルウェイ民謡)などである。

4. 軍歌と唱歌

軍歌、愛国歌については、欧米の曲、日本の曲を原曲として作られたものがある。日本の軍歌もコリアでは抗日軍歌として歌われた。それについて関は「「唱歌」の範疇には、讃頌歌をはじめとした歌だけではなく、清日戦争と露日戦争の時、入ってきた日本の軍歌と植民地政策を通して入ってきた日本の唱歌なども含まる」(ミン、1997、i)とも述べている。

日本軍歌がコリアに移入したということについて、「第一に、日清戦争と日露戦争が朝鮮半島でも戦闘が行われたという点、第二に1894年6月に日清戦争に参戦するため派兵された日本の第一軍司令部所属の第4師団軍楽隊もいっしょに朝鮮に派兵されたという点、第三に、コリアの独立軍歌と北朝鮮の革命歌謡、そして中国朝鮮族の抗日軍歌などに、日本軍歌の旋律を借用したものが多かったが、これらの歌のなかで相当数が日清、日露戦争の時、作られたものだったという点である。日清、日露戦争の時、日本の第4師団軍楽隊が持ってきた軍歌を、一般の人々が日本の軍歌とは知らずに、無意識的にについて歌ったものが、口伝されて、そこに新しい歌詞をつけて独立軍歌、革命歌謡、抗日軍歌などとして歌われたものだと推測される。」と述べられている。(イ、キム、ミン、2001、53)

このように日清戦争、日露戦争当時、日本作られた軍歌がコリアでも軍歌として歌われたのである。例えば、「少年行進歌」「抗日戦線歌」(原曲:「敵は幾万」)、「少年軍歌」(原曲:「日本海軍」)、「勧学歌」(原曲:「勇敢なる水兵」)、「勝利行進曲」「光復軍抗日戦闘歌」(原曲:「軍艦行進曲」)など日本の軍歌が日本に対抗するコリアの軍歌として歌われた。

そのことについて、安田は「日本軍歌を「奇」として喜んだ韓人」として、「韓龍熙氏の『韓国童謡音楽史』(1988年)は、「日本は日清戦争前後にすでに韓国の国事に深く関与しながら、日本唱歌と軍歌を広く普及した。日露戦争がおきた1904年前後には日本の軍歌が広く普及していた状況にあり、これを無意識的に歌っていた。したがって、日本の軍歌の旋律によって愛国歌を作って抵抗の意志を表出していたものが数多く出始めた」と述べている。」(安田、1999、138) また「1894(明治27)年7月発行の『音楽雑誌』(第46号)には、こうした意見を裏付ける記事が掲載されている。「朝鮮における軍楽隊の奏楽」によると、仁川港であろうか、居留地の町を乗馬憲兵三名を先頭に、左右を巡查数名に護衛された陸軍軍楽隊が奏楽巡回し、兵士およそ数100名がこれに続き、さらに、日本人ら数百人が軍歌を歌いながら後を追ったという。目撃した記者は「韓人がこれを奇として喜ぶを喜ぶ」と感想を述べている。」(安田、1999、138-139)と述べ

ている。

また、安田もいうように、日本で最初に軍歌が作られた同じ時期に作られた、「鉄道唱歌」も、四小節四段形式、ドレミソラの長調5音階という「軍歌調唱歌」の典型で、前に述べたように、この曲もコリアでは大いに受け入れられた経緯もある。

何ととっても、軍歌には行進曲風の明るい元気な曲が多く、歌詞さえ変えればどこの国の軍歌にも通用しそうなものである。当時そのような曲を作曲することができる音楽家がいなかったコリアにおいて、他国の軍歌に、あるいはその出自を知らないままに、自分たちの戦いの歌詞を作って歌ったということは十分に考えられる。このことは軍歌だけではなく、前に述べたように愛国歌もそうであった。

終わりに——改めてコリアの唱歌とは

これまで述べたコリアの唱歌では、主にヨーロッパ、日本などの外国曲に歌詞を付けたものが多かったが、コリア人の作曲したものも現れた。コリア人音楽家の中で、代表的な三人、金仁湜と、李尚俊そして白禹鏞は、唱歌を作曲している。前者の二人金仁湜と、李尚俊はキリスト教会およびミッションスクール出身であり、白禹鏞は軍楽隊出身であり、その出自は異なるが、いずれも1880年代に生まれた、コリアの近代音楽の第一世代であり、先駆者といえる。しかも、彼らに共通するもう一つのことはいずれも留学経験がなかったということである。洪蘭坡など第二世代以降の音楽家は日本などに留学し、正規の西洋音楽教育を受けたのに比べると、第一世代はコリアで教会や軍隊などで実践的な音楽の訓練を受けたが、その当時としては音楽学校における音楽教育を受けてはいない。彼らはまた、唱歌時代の音楽家ともいえる。

コリア人の作曲した曲は、日本の唱歌と似たものと、日本の唱歌とは異なるものがあった。それについては、「わが国の創作唱歌は異文化である西洋音楽を母体として、日本唱歌の影響を受けていて、韓国の独自の音楽様式として変貌するは失敗したが、それは必ずしも西洋音楽の一変形とだけ見ることができないという側面ももっている。たとえば唱歌の形式は西洋の楽曲から借りてきたものではあるが、韓国の伝統声楽曲である民謡、歌辞、時歌、雑歌などの影響を受けたためである。唱歌で発見される旋律の5音音階の特徴、調子と同じく類型化された音律原理、民謡の素材などがその根拠となっている。」（イ、キム、ミン、2001、115－116）とも述べられている。

さて、この論文の最初に唱歌の定義を「1945年以前わが国に輸入された全ての西洋の歌と、童謡、大衆歌謡、歌曲などに分化される以前に、わが国の人々によって作られた西洋式歌の総称」として紹介した。このことは、童謡や大衆歌謡、歌曲などの音楽形式が出現した1920年代以降では、唱歌という形式はなくなったと解釈される。しかしながら、実際には、学校教育では唱歌は継続して用いられているし、前に述べたように「唱歌集」は1896年から1946年まで出版されている。そしてその唱歌集の名称もただ唱歌、学校唱歌、普通唱歌というだけではなく、流行唱歌、

遊戯唱歌、青年唱歌、青春唱歌、叙情唱歌、笑哀唱歌、地理唱歌、楽園唱歌なども出現している。

しかしながら、その当時、刊行された音楽集は、唱歌集だけではなく、讃美歌集、俗曲集、雑歌集、童謡集、歌謡作品集なども刊行されている。また、1920年代以降、音楽形式としても童謡、より芸術性の高い音楽（洪蘭坡はそれを「朝鮮歌謡作品集」として出版しているし、戦後になって、歌曲と呼ばれるようになる）、大衆音楽（流行歌、流行唱歌などと呼ばれた。なお、トロットという名称は、やはり戦後になって用いられるようになった）などが成立したという事実が存在する。

したがって、その当時、すべての曲が唱歌と呼ばれていたわけではなく、すべての音楽曲集が唱歌集であったわけではないが、そのような「唱歌集」には狭い意味での唱歌だけではなく、童謡、大衆歌謡、歌曲などといわれる形式の歌も載せられているのである。また、流行唱歌、青春唱歌、叙情唱歌などの多くは、後で大衆歌謡という形式として整理されていくし、遊戯唱歌などはやはり童謡という形式として整理されていくのである。

このように、唱歌という名称は1945年までは、童謡、大衆歌謡、流行歌謡、歌曲などを含めた曖昧で多様な音楽形式として用いられていたのである。そのような多様な意味を持つ唱歌という名称は、現代の時点でコリアの音楽史の検討をする過程で整理されたといえる。しかしながら、唱歌、童謡、歌曲という音楽形式は、日本でも同様に、確かに定義からすると区別されるものの、実際の用法ないし、その厳密な境界を確定することはきわめて難しいといえる。

いずれにしても、狭義の意味での唱歌は、近代化の初期に出現し、一つは主として讃美歌として移入された西欧の楽曲および日本で作られた楽曲に、啓蒙的な歌詞をつけた歌であり、もう一つは日本の植民地政策で作られた朝鮮教育令によって制度化された学校でほとんど日本の学校と同じ歌であった。「愛国歌」や「抗日軍歌」にみられるように啓蒙的な歌詞の内容が政治的なものであれば、民族意識の高揚をはかり、反日的な様相を伴っていたが、「京釜鉄道歌」や「勸学」にみられるように産業的、生活的なものであれば、個人の日常生活の近代化ともいうべき、新しい生活の意識とリズムを定着させる働きをしたもので、必ずしも反日的なものではないといえる。いずれにしても、唱歌は、教会、軍隊、学校などで、それぞれの社会的役割が重視されたもので、音楽そのものの芸術性、演奏と鑑賞という点では、未だ十分に考慮されてはいないといえ、それらを準備した段階であるといえる。

参考文献

日本語

高仁淑『近代朝鮮の唱歌教育』九州大学出版会、2004

安田寛『日韓唱歌の源流』音楽の友社、1999

関庚燦「韓国の唱歌(1)(2)(3)(4)」132-147、安田寛編『原典による近代唱歌集成』ビクターエンタテインメント株式会社、2000

関庚燦「韓国の唱歌—近代音楽の形成過程における受容と抵抗の歴史」、235-239、安田寛編『原典による近代唱歌集成』ビクターエンタテインメント株式会社、2000

『新訂標準音楽辞典』音楽の友社、1966

コリア語(한글)

金煉甲(キム・ヨンガプ)『愛国歌作詞者研究』集文堂、1998

문옥배(ムン・オクペ)『한국 찬송가 100 년사』예술、2002

민경찬(ミン・ギョンチャン)『한국 창가의 색인 과 해제』한국예술종합학교 한국예술연구소、1997

関庚培(ミン・ギョンベ)『韓国教会讃頌歌史』延世大出版部、1997

高麗大学校亜細亜問題研究所編『六堂崔南善全集』1973、玄岩社

이강숙(イ・ガンスク)・김춘미(キム・チュンミ)・민경찬(ミン・ギョンチャン) 편 『우리양악 100 년』현암사、2001

『한국민족문화대백과사전』한국정신문화연구원、1991

한국예술종합학교예술연구소편『한국작곡가사전(韓國作曲家辞典)』시공사、1999